五百番の内

嫗山姥

近松門左衛門作

漢に三尺の斬蛇あつて四百年の基を起し。秦に太阿工(上)市あつて六國を合す。古の君子是を以て自ら衛ると。子路が謐ひし劒の舞。返す袂も面白き。我が神國の天叢雲。百王護國の御守オロシそ。目出度けれ。地されば今上天暦の帝御代知食す慈愛。波静なる遠江枝を鳴さぬ時津風。濱松の宿の邊に當つて。空に紫の雲氣靉き斗牛の間に英々たり。爰に清和天皇の正統攝津守源の頼光十八歳。斯くと傳へ聞き給ひ唐土の張華が名劒を得たる例ども。疑もなく此の邊に天下の重寶と成るべき。名劒埋れあるに極つたり。尋ね求めて父滿仲の武功を繼ぎ。源氏の子孫に傳へんと同年の若者渡邊の源五綱に御心を合せ。近隣の宿々二夜三夜泊り鷹野に事寄せて。在所尋ぬる名劒のフシ小夜の中山に。お宿を召されける。地其の頃嵐子女院の御弟清原の右大將高藤とて僅の儒家に生れながら當今の御外戚。姉女院の威勢を籠つて中納言の右大將に經上り。榮耀奢身に餘り諸國の名所を遊覽し。今宵此の宿御泊と宿割の侍肱を張り。むら〳〵と立掛り詞ヤア〳〵當宿に。此の家ならで御本陣になりさうな家なし。先立ての宿札何者ぞ。幕も札も早々〳〵捧くれと呼ばはりける。亭主驚きこれ〳〵粗忽なさるゝな。忝くも攝津守頼光地源氏の大將の御宿札と制すれども。なんの頼光源氏でも毛蟲でも。清原の右大將殿御威勢には畝ふまじ。伸し張らば幕引斷り。宿札打割り引摺り出せと罵りける。詞渡邊の綱聞きもあへず。何條先に打つたる宿札指でも差さば踏殺さんと。躍出づるを頼光暫しと鎭め給ひ。同じ武家にもあらばこそ長袖に勝つて譽ならず。殊に彼は右大將女院の弟。朝家に敵するなどと讒せられては不覺なり。地密に此の家を立出で宿端に一宿せん。汝殘つて穩便に明渡すべしと。手廻少少御供にて。裏の小道の松蔭よりオタリ山路にへ添うて出で給ふフシ時刻移ると。地頼光の席札引抜いて。清原の右大將殿御泊と高々と押立て。引並べて右衛門督。平の正盛同じく泊とフシ席札二本ぞ立てたりける。地渡邊今は堪りかね躍出でて下人ばら。取つて突退け大音上げ。詞清原の右大將は。右衛門督正盛と名を二つ付けられしか。先に打つたる宿札替ゆる法はなけれども。主君頼光若輩なれども御思案深く。職者の右大將に張合ひ後日の讒を受けん事。犬に食はれし同然とおとなしく宿を替へられしに。定めて是は平家の大將正盛な。地彼と相宿召さるゝからは頼光も相宿と。正

盛が席札取つて引抜き。叩き割んとする所へ卒の正盛。怒れる聲にてはつたと睨み。詞ヤア己れは頼光が下人綱といふ童よな。此の度右大將殿東の名所御遊覽に。御同道申すからは相宿の席札誰に憚る事あらん。主從ともに口頭蒼も切れぬ小悴ども。元の如くに札立て直せ。但し割れば割つて見よと太刀の柄に手を掛くる。渡邊莞爾と笑ひ。ヲ、源氏の慣び御邊の樣なる相手は。大人の手を出す迄もなく前髪立の子供の請取。主君頼光に宿を明けさせ右大將の威を籍つて。御邊温くり泊らんとや暖な事。地右大將一家の外踏込まば空腦雍がんと。席札微塵に踏碎き仁王立に立つたるは。金輪際より忽に フシ生抜いたるが如くなり。地正盛そゞろ恐しく身は顫へども押鎭め。己れ生けて置く奴ならねど高官の御同道。騒動も畏あり爰は某大人しく宿端に別宿すよつく性根に覺えて居れと。聽ぬ顏にて立歸れば渡邊は見向もせず。右大將の宿入の中押割つてのさ〳〵と羽交伸したる夕鴉。泊りやないか旅籠屋の門賑。はしく三重へ暮れかゝる フシ上り。下りの旅人の。地粹と野暮とに揃れて揉まれて共摺れの。招く薄もおじやれ〳〵が フシ戀をよぶ。假の契も末かけて歌へ其方百切りおりや九十でも。心次第の フシ蹴枕。フシ笠も預る。地股引洗ふ。洗足の湯と膳立とぐわつた菱屋の門構へ。本陣宿の忙しさ數多の出女下男。中に若葉の喜之介が跡の季よりも角前髪。地氣も取れて顏の色白瓜膾夕飯の。拵へ急ぐ薄刃の音のちよつき〳〵ちよき〳〵〳〵。ちよつきり切盤百人前を夢の間に。仕立て濟して息休フシ煙草咥へて立ち居たる。地下女の小絲忙がしけにこれ野良松。詞暇の無い旅籠屋奉公。殊に今日は清原樣とやら麥藁樣とやら。お公家樣の大客。上つ方は物靜で御料簡もあるべきが。下々の癖に口悪く。膳が遲いの何のとていぢらせてたもんなや。地なぜにきり〳〵働きやらぬ煙管はわしが預ると。引奪れば喜之介エ、小喧し詞い男の仕事がもどかしさうなこれ。料理したり水汲んだり椀拭いたり門掃いたり。打つたり舞うたり此の手一つで百足の代も仕る。貴樣の樣に毎夜々々旅人寢屋へ引入れ。煮燒もせぬ加減のよい味い手料理振舞うて。呻く程錢儲けて緩と朝寢召さるゝと。地我等が仕事は格別歌潤めた錢鏹脱いたり差いたりせまいか。さればいの。ヲ、フシ嘘ぢやないとぞ笑ひける。詞ムゝ是は聞き所。なんぢや毎夜帶解き勤するとの云分か。これそんな小糸ぢやないぞや。傍輩業は面々に勤次第に錢金貯め。親里貢ぎ身に一重も飾れども。地私は此方を思ひ染め面倒見よう見られうと。頼もし盡の言替せ若し末の緣ありて。一所にも暮したいと隨分と身を嗜み。旅人の酒の挨拶肴に小唄謠うたり。僅の錢を頂く時は涙が飜れて口惜しけれど。若い此方が奉公の身で義理順義もあるものと。一錢も身に付けず皆此方に

渡すぞや。一言可愛というたとて罪にもなるまいほんに思ふ程にもない憎い男と フシ首筋に歯形ぞ。戀の極印なる 地喜之介ほろりと涙ぐみ。 詞ヲヽ、過つた堪や〳〵。 サア 地わつさりと仲直り機嫌直して盃事。幸ひ肴は此の膾まづ祝言の心持。そんなら祝うて女房から私が手酌でこれ献いた。我等は得物の此の茶碗吸物は養賓の豆腐。目出度う諸はう 詞ヘ寂光の豆腐茶碗酒の。樂もかくやと思ふばかりの膾かな。 地あひよすけよといふ紅の前垂膝に打蕩れ。 フシ可愛奴とぞ戯るゝ。 地かゝる所へ右衛門督平の正盛参上と。案内すれば喜之介小糸。口上の趣を奥へかくとぞ取次ぎけるゝ。 地清原の右大將出迎ひヤア正盛 詞近うく〳〵と 詞対座に請じ。扨も御邊と某昨日迄泊々同宿にて。名所古跡の物語旅宿の徒然忘れしに。今宵は賴光めに支へられ思はぬ別宿明日の泊を待ち兼ぬる。今宵の淋しさ推量あれとありければ。正盛謹んで。御懇意の餘り申し上げたき仔細の候。其の故は某が家來物部の平太と申す者。先年坂田の前司忠時と申す浪人侍と口論し。彼の坂田を討ちは討つて候へども。彼には男女の子供あり親の敵と狙ひ。若し平太めを討たせては某武道立ち申さず。一寸も側を離さず旅の末まで召連れ。幸ひ君と御同宿御威勢を以て昨夜まで心安く臥したるに。 地今宵野端の別宿平太めに過も候うては。弓矢の不覺あはれ彼の者御次に一宿せさせ下されば。生々世々の御厚恩といひも切らぬに右大將。 フヲ何より以て易い事其の者これへといふ間に。 詞鎧を内へ舁据ゑさせ六尺豐の大男。日影見ぬ目の色青く。月代伸びて髪長くノシ野邊の霜に異らず。 詞右大將近く招き。物部の平太とは和主よな。敵持の用心尤なから此の高藤が園うたり。某が威勢の程人間は愚か。 地鬼神にても某が側近く狼藉仕出し。指でもさゝば天子に弓彎く朝敵同然。身を知らぬ者やあるべき何の用心月代剃ら せ梯けづり。世間廣くのさばれ高藤がかく言ふからは。 地樊噲張良に抱かれて居ると思ふべしと。過言上なく罵れば正盛悦び有難しく〳〵。彌々賴み奉る。明朝御見舞ひ申さんと フシ一禮。してぞ歸りける。 地喜之介小糸は襖の蔭後先とつくと聞屆け。 詞あれ〳〵父様討つた平太めに極つたり。 地日頃賴みし契約は今宵ぞや。女の腕にて仕損ずるは必定。必ず後を賴みますと小稜引上げ身繕ふ。喜之介押へて急くまい〳〵和女に兄御もあるけな。其の兄も出合はずまして女の仕損じては恥辱なり。粗どなししてやらう止を刺せば同然と。躍り出づればアヽ忝い。とても事に父様の讓の銘の物。常に人の氣のつかぬ思ひがけのない所に 地取つて置いたと一間床板疊を引上ぐれば。一腰の金作人こそ知らね紫の。虹立騰る名劍の フシ不思議と後に知られける。 地喜之介鞘口拔き見れば氷の燒刃玉散るばかり。サア本望は遂げたるぞ必ず急くまい〳〵と。

いふも鬮路の朝烏　フシ飛立つ心ぞ道理なる。それ〳〵奥から行燈提げて誰やら來る。怪しめられなと目彈しちやつと忍べば小糸反らさぬ顔鼻唄で。座敷取置く玉箒ヲシ紙屑拾うて居たりけり。地敵の平太燈火背けこりや女物頼まう。間明日のお立は明六つ。其の點に合ふ樣に月代一つ頼みたし。上手な髪結あるまいか。　アイ〳〵お易い事。どりや呼んであけましよと起たんとすればいやく。些樣子あつて男はならぬ。地女の髪結あるまいかといへばはつと心付き。間なう〳〵お前はお仕合せ。私は地體町代の娘。地髪月代一通りは小額眉際中剃逆剃乱剃。　お顔はたつた一剃刀にごし〳〵。唇なりと鼻なりとお首なりともころりつと剃落して上げませう。間アヽ忌々しい氣味悪い。地仇口きかずとはや剃れと。剃刀出し髪おつさばき橡先の水桶に。頭浸して紅葉ばの焦るゝ小糸の心の内。喜之介は襖の陰今や出でん〳〵。と互に目配せ氣を通しこれ〳〵頭がまだ揉めぬぞ。かう剃りかゝつて氣を急ぐ事は些ともない。揉めぬうちに剃りかゝれば剃刀が外れると。いへども更に氣も付かず。消ゆる命は塵取に　フシ落つる雫のはかなさよ。地サア今が大事の盆窪。俯かんせと髪撫上ぐれば喜之介は。襖を密つと締め明けに後に立つても親の敵聲をかけぬは口惜しと躍ふ色を女は悟つて。申し旦那樣。　お前は嘱さうなお侍。定めし人斬らんした事もあらうの。ヲヽ斬つたとも斬つたとも。地ヲヽその斬つた坂田が娘糸萩。　親の敵といふより早く抜討の。首に連ねて髷一房。兩膝かけて一太刀に　フシ水を切つたる如くなり。地サア仕果せた立退んとかひ〳〵しくも首提げ。女を小脇にしつかと抱き　フシ一散にこそ落失せけれ。地右大將が侍ども何事と走り出で。南無三寶平太討たれ候と。呼ばはる聲に高藤駈出で地踏鞴踏んで。間エヽ口惜しや無念やな。正盛に向つて詞なし。地よし地を潜り雲に入るとも高藤が威勢にて。搦捕りで置くべきか追つかけ討ちとれ者どもと。怒れる聲は松吹く風月日に擬ふ目の箭返しける　フシ二人は漸々。地宿端まで走りつき。　振返れば追手の提灯八方を取巻きて。落ちんずやうこそなかりけれエヽ口惜しや。生中追手に討たれんより御身を害し。腹切らんとは思へども敵に首を取返され。我等が首をも渡さん事屍の上の無念なり。地誰が泊か知らねども実を頼んで刺違へ。死骸を曝して黄はんと砕くばかり門の戸叩き。間粗忽ながら我々は親の敵を討つて。立退く折柄追手厳しく候へば。何方かは存ぜねども御庭を借り切腹仕り度く候。御慈悲頼み奉ると大音揚げてぞ申しける。地所こそあれ頼光の泊の宿。渡邊聞くより飛んで出で。實否知らねど敵討とは心地よしと。手づから門を押開きサア圍うたおはひりやれ。攝津の守頼光の旅宿。かくいふは渡邊

の源五綱。日本國が怒つても蚊の喰ふ程にも思はじこそ。地緩りと休息あれと元の貫の木しつとゝ下し。フシ御前に伴ひ出でにけり。地頼光對面まし〳〵。間彼等は夫婦か兄弟か。假名實名敵討の首尾具に聞かんと宜へば。さん候某は信濃國碓氷の庄司が悴幼名は荒童丸。父殁して孤となり當所に賤しき下司奉公。此の女と傍聾の奸に承れば。此の女が父坂田の前司と申せし者。平の正盛が家人物部の平太に討たせ。俱に天を戴かぬ恨を一太刀報ぜんと狙へども。一人の兄は行方知らず。女の力に叶ひ難き物語見捨て難く。地今宵南原の右大將の泊に敵を見出し。思のまゝに討取り首持參仕る。打物は此の太刀此の女が重代。智慧文殊の化身と傳へし。平泉の文藤實壽が千日潔齋して鍛つたる利劍の驗。片手なぐりの一打に御覽候へ此の大首。女が持つたる鬘一房兩股兩膝只一刀に大の男。七つに切つたる業物今宵の御情を謝せんが爲。間此の女が獻上御佩替とも思召さば。生前の悦驕御芳志には死骸を隱し給はれ。地サア。今生に思ひ置く事はなし。いざ來い刺違へんとつゝと寄る。やれ渡邊あれ留めよと押分けさせ。太刀を拔いて御覽あれば。明々として芙蓉の開くが如く。女は星の列る如く光は波の湧くが如し。唐土晉の武帝は天下を治めて吳國の方に。紫の雲氣立つを奇しみしに。雷煥といふ者天文を考へ。土中を堀つて干將莫耶の二劍を得たり。然るに此の宿に當つて紫の雲氣鍵さし事。遠き異國の昔を思ひ。必ず名劍あるべしと鷹野に事寄せ一宿せしに。地今宵此の太刀手に入る事源家の武功天に適ひし其の威德。首を討つ餘りの鋒風にも散る鬚を切り。兩膝かけて落ちたる事日本無雙の名劍。名は體を現せば則ち鬚切膝丸と名付くべしと。謹んで頂戴あり御千孫長く傳りし。フシ和國の寶となりにける。間扨其の女に兄もあるとや重ねて故郷へ送らべし。荒童には我が頼光の光を譲つて。碓氷貞光と名乘。地奉公せよとの御諚の趣。二人はあつと頭を下げ。フシ悦び涙を流しける。地かゝつし所へ平の正盛大勢を引率し。間門を叩いてヤア〳〵頼光。乘くも右大將殿の御前近く。人を殺めし暴者を引込み。天子同然の右大將殿を輕しむるは朝敵にも勝つたり。女童に繩を懸け。頼光渡邊主從共に切腹せよ。異議に及ばゝ踏込んで。片端に踏殺さんと傍若無人に罵つたり。渡邊くつ〳〵と噴出し。ヤイ天子同然とは誰が事。己れ等腕は叶はず手は立たずロばつかりは人らしく。官位を以ての威しは喰はぬ喰はぬ。さり乍らぎしみ合ふも大人氣なし。サア渡す請取らば取つて見よと。地門の戸さつと押開きすつくと立つたる其の勢。正盛主從色違ひ。フシ膝わな〳〵とぞなりにける。地荒童つゞいて飛んで出で。間是旦那者までは旅籠屋の下司喜之介。今は頼光の御家人碓氷貞光。渡せよ出せといはずとも幸ひ此處も旅籠屋なり。此處へ來て

獨捕れサァ地這入らんせ泊らんせ泊りぢやないかえ。旅籠の料理はお望み次第頭から爪先まで。刻んで〳〵さく〳〵汁。眞二つに胴切の。血腥い燒物冥土の道は合宿なし。焦熱地獄の水風呂も沸いてござんす。ざつと行水阿鼻地獄。泊らんせ〳〵 フシ泊りぢやないかと招きける。地右大將高藤遲れ馳に駈け來り。詞ヤァ臆したるか正盛。頼光渡邊なればとて鬼神にてもあらばこそ。後詰は高藤と地いふより正盛憚り出し。乘込んで踏潰せ承ると切つて入る。源氏方にも餘さじと。兩勢どつと入亂れ火水に。なれとゞ三重〳〵戰ひける。地頼光は忍びの旅小勢の供人大半討たれ。貞光渡邊只二人攻來る敵の眞中腕骨。胴切縱割車斬殘立て〳〵三重〳〵追掩る フシさしもの大勢。地しどろになつて見えけるが近郷の農人浪人右大將が威勢に與し。我も〳〵と入替へ〳〵オクリ射る矢は。〳〵雨の如くなり。地貞光も渡邊も心は彌猛に逸れども。飛道具を防ぎかね何と貞光。詞若し我が君に掠矢でも當つては末代の瑕瑾。一先づ落し奉らんと彼方此方と見廻れども。嵳高塀に圍は堀裏門堅く鎖したり。ヤァ此の門一つ押破るは易けれども。後より寄手の込入るも喧し。上へそつと持上げて蹴込の下より落し申さん尤と樓門高き瓦葺尺に餘りし四角柱。二本を二人が面々に引抱へて。ヤァえいやうんと拔ぐればさしもの大門礎離れ。天より釣つたる如くなり頼光も笑はせ給ひ。詞門を衝る金剛力士仁王を家來に持つたれば。我が行く先は關もなし女は兄が行方を尋ね。地兄弟打連れ來れ一足も早や落ちよ。我は美濃路を上るべし故等も粗に切散らして追付けと。悠々として退き給ふ フシ御有樣ぞ不敵なる。地其の隙に寄手の軍兵餘すまじきと込入つたり。兩人今は心安し雜人ばら一人宛。切つては手間遠はか行かず後日に此の門建直して遣るばかりと。門柱引放し手に提げ大勢を左右に受け。醉象が岩を割り飛龍の波を叩くが如くはらり〳〵と三重〳〵薙立つる 地ツメ馬も人も堪らばこそさしもの大勢打挫がれ。高藤正盛力なく後をも見ずして逃去れば。ヲ、面白し心地よし君に追付き奉らん。疾う〳〵急げどう〳〵。どうど踏んだる街道も武勇の道も一筋に。古參の渡邊新參の碓氷の貞光奉公始め。門に手柄をあらはして仁王二天に四天王出づべき兆と聞えける。

第二

地松浦潟領巾麾山の石よりも。積る思は猶重き岩倉の大納言兼冬公の御娘。澤潟姫と申せしは源の頼光と。御緣邊の契約も互に待てば久方の。月日重なり年も經たり情盛も徒に。右大將高藤が讒言故。頼光は行方なく御文の音信さへ。スエテ枯野に弱る秋の蟲。世に便なき憂き節に。地若し御短慮の事もやと。御寢間の奉行寢ずの番。女中の外は男混ぜずの大役は。 フシ女護の島に。異らず。地お局の藤浪御側に立寄り。詞なう憂な

お子。なぜに浮き〳〵なされませぬ。これ程大勢集つて浮世噺の高笑も。皆お前を勇めの爲お煩でも出た時は。親御樣への御不孝 地日頃のお氣に似合ひませぬと。勇められても勇まぬ顏。 詞ア、又局の氣詰な意見聞きたうない。日本國の花紅葉を今此の庭に移しても。なんの心が勇まうぞ。 地吉日極り頼光樣へ嫁入して。今頃はお腹に帶をも結ぶ筈を。あの右大將づら奴に妨げられ。剩へお行方知れず。何處を當所に一筆の。問はせの文さへ フシ長枕。 地此の長の夜を誰と寢よおりや泣くまいと思へども。涙が如何も堪忍せぬこらへてたもとはら〳〵と。玉を貫ぬく御目許。 腰元茶の間仲居まで御道理樣やと諸共に フシ貰ひ。涙にくれければ。 地お局は氣の毒がり。 詞ア、なんぞいのお力はつけもせで。和女衆までめろ〳〵と忌まノ〳〵しい置いてたも。ヤアそれはさう煙草賣の源七はまだ見えぬか。氣さく者の通者今にも來たら。御姫樣交らに迎ひ鬼して遊ぶまいか。 地こりや氣の替つた思ひ付き早う煙草が來れかし。煙草々々と待つ宵の。松葉煙草の柔こきオクリ女中へ仲間ぞ賑しき フシ昔は色に。上り詰め。 地今は浮世に下り坂田の時行と。埋れし名も父の仇晴さんと思ふ志。厭かぬ夫婦の中をさへ三行半の生別れ。袖は涙の革行李を今は身過と引摺げ。刻。煙草 フシ油引かずと賣り歩く。そりや煙草が來たわと腰元中早う〳〵と呼入れ 詞これ源七先づ此の革籠は預る。尻褰も下しやいのお姫樣より御意がある。此方も以前は歴々で惡性故に仕損ひ。その妾になりやつたけな。傾城とやら廓とやら大内には珍しき。三味線の一曲を常々にお望みゆゑ。コレ三味線も調へ置くサア〳〵所望とありければ。ア、つがもない。尤以前は傾城の一つ賣も仕り。三味線鼓弓淨瑠璃文作野良一卷の諸藝なら。 地此方へ任せておく座敷に吉野の山の連彈も。昨日の昔今日は又吉野煙草の刻賣。股引懸で三味線とは。茶漬に鯉の御望みひらさら御免と逃出づるな。女房だち引留めて其のいひ樣がもう面白い。何をいふもお氣慰め平に組むと強ひられ。 地源七下地好の道てんぽのかはやりませうと。箱より出す三味線の。 地絃は昔にかはらねど彈く其の主の成れの果。親の撥胸ナホス紙胸の音色優しく 三重へ彈きなせり。紙衣の袖に。置く露と。共に離れし妹背の中。あはれ昔は全盛の。松の位も フシ冬枯れし。風呂敷包。行く先は。知らぬ旅路にとぼ〳〵と。 スエテ築地の蔭に休らへば。ヤア 地珍しい三味線。なんぼ大内方でも洒落の浮世に廻り來る。車寄より立ち聞けば。ハ、ア 詞不思議やあの小唄は。我が身廓にありし時坂田の藏人時行殿に馴初め。 地作り出せし替唄歌。彼の人ならで誰が傳へた懐しや。どうぞ入込み見たいものぢやと出放題に聲張上げ。 詞是は浪花の遊女町に。誰知らぬ者もない傾城の右筆。 地一通の狀文なら恐らく私が一筆で。叶は

ぬ戀も。假名書筆。びらりしやらりのかすり墨生娘遊女妾者。後家尼人の女房まで段々の書分は。私が家の傳授事。若しそんな御用なら フシ頼みあれとぞ言ひ入れたる。地奥には女中耳を澄しきつても變つた賣物。いざ呼入れて痴話文書かせてお慰。更科掃部呼んでおじや。あいと答へて二人連にて走り出で。ヨこれなう傾城の右筆殿は此方か。此の御殿の姫君何やらそもじに御用あり。此方へいざと手を取れば。ハア 地御用とは何ならんお目もじさまにと夕顔の。庭の飛石すな〳〵〳〵。ちよこ〳〵〳〵と奥座敷へ。何の遠慮も並み居たる。内裡上臈に場うてせぬ ッシいづれそれしやと見えにけり。地煙草賣の源七も何心なく側近く。顔と顔とを見合すれば。ヤア離別せし女房南無三寶とこ臨の。女はそれと水臭き男畜生人でなし。赤恥かゝせて退けうかと飛立つ胸も人目の關。押鎮め〳〵。心を碎き折々に フシ後目に鬼むも戀なれや。地姫君何の氣もつかずこれなう紙衣。そなたの物どし褄外れ如何樣常の女子でなし。さうした姿になりやつたは定めし深い譯あらん。一河の流も他生の縁包まず語りやとありければ。詞ア、何方かはお優しいお詞。お草ねなくともいひたうて〳〵胸のたぐる折しも。さらばお咄し申しませう。恥しながら私が昔はう河竹の傾城。荻野屋の八重桐とて太夫仲間の立者と。いはれし程の全盛の末も遂げぬ仇戀に。登り詰めて此の通。地夜な〳〵變る大盞の中にも坂田の某とて。水揚の初日よりふと逢ひ初めて丸三年何が互の浮氣盛登る程にける程に。(登る程に〳〵。イ)切利天の中二階夜盞なしの床入に。掛鯛樣と眞名を受け水も漏さぬ仲なりしに。詞又同じ廓に小田卷といふ太夫。彼の男に行きつき毎日百通二百通。書きも書いたり痴話文は大方馬に七駄半。船に積んだら千石船。車に載せたら 地えいやらさ。木遣でも音頭でも祈つても呪うても微塵けもない二人が仲いよ〳〵募つて逢ふ程に。小田卷大きに腹を立て忘れもせぬ八月の。十八日の雨上り月は山より鹿染の。櫛ひらりと取つて捨て。白無垢一つに引扱き腰もあらはに駈來り。私が膝にふうわりとん。居懸つて詞これ八重桐。あんまり見られぬ嫌ぢやそやサア。男をたもるかたもらぬか否か應か否か。二つに一つの返答が聞きたいと。胸づくしを引攫む。此方も一期の大事そと弱身を見せずこりや。詞小田卷とやら管卷とやらひかりは喰はぬ出直しや。地此の廣い日本にあの人ならで男はないか。よし無いにせよ有るにせよそれ程ゆかしい男なら。何故に先に惚れなんだ男盗人いき傾城と。いひ樣取つて投げ付くれば明障子打破り。繼三味線を踏碎き緣より下へころ〳〵〳〵と。這柏横までこけかゝり。木槨南天めつきり〳〵切石の上へ眞俯向。鯉は一石六斗三升五合五勺。そりやこそ喧嘩が始つて人事の此方の太夫樣に。引をつけては叶ふま

い加勢をやれといふた程に。遣手引舟仲居飯炊出入の座頭按摩取。巫女山伏に占屋さん雪踏片足に下駄片足。草鞋掛で來るもあり。嘉所から座敷迄太夫樣の仕返しと。彼處では叩合ひ此處では撲合ひ踊合ひ。茶棚廻煙草盆あたる物を幸に。打めぐ打破る踏碎くめり〳〵ぴしやりと鳴る音に。そりや地震よ雷よ。世直し桑原々々と。我先にと逃さまに水撥桶盥にこけかゝり。座敷も庭も水だらけになる程に。南無三海嘯が打つて來るわ雨悲しやと喚くやら。祕藏の仔猫を馬程な。鳳が哇へて駈出すやら。屋根では鼬が躍るやら。神武以來の惰氣爭フシ此の事世上に隱れなく。地彼の男は其の場より親御樣の勘當受け。我が身も廓を夜脫し て根本戀路の浮名とる。鍋の蓋取る杓子取る馴れぬ世帶の其の日過ぎ。男奴故で御座んする。ア、詞あんまりしやべつて息切れた。お茶一つ下さんせとぞ語りける。地姫君を始め腰元衆。扨心中の女郎やたとへかなる身になつても。思ふ男と添ふからは面白からうと宜へば。詞されば末を聞いて下さんせ。其の男の父親が。闇討に討たれ敵討たねば叶はぬと。私とは緣を切り行方もなう別れて。親の敵を狙ふとは跡方もない赤囈。地我が身に秋風立ちけれども何を機に退かれもせず。親御樣の死なんしたを屈竟一の托言に。敵討との口上は驛迦でも一杯參る事。まんまと私を誑り女房には紙衣を着せ。其の身はちやんと榮耀らしい若い女中に立変り。三味線彈いて居けつかり。くさりくさるを見る樣な。日本國の姫御前の因果を一つに固めても。我が身には及ぶまい初對面の皆樣へ。ありし昔の懺悔話し。お恥しやとばかりにておろ〳〵。涙にくれければ。ア、詞道理々々身にかゝらぬ此方とさへ煙たうて堪られぬ。さりながら構へて短氣な心を持ちやんなや。地まだ話したい事もあり奥へ通せと姫君は。御簾の内に入り給へば。サア苦しうない奥へおじや。此方へ〳〵と人々はオクリ皆々へ一間に入り給ふ。地後見送つて八重桐さらば奥へ參つて。憎さも憎し男の懺悔。いうて退けうと入らんとするを。時行取つて引戻しはつたと睨め。エ、詞さすがは流の女ぢやな。親の敵を討つまでと相對づくの離別ならずや。只今の詞は誰にいふ當言。未だ敵の行方は知れず心を碎く夫の體。地哀とも思はず己れが榮耀に引當てゝ。面白さうな仇口。エ、恨めしやとばかりにて無念涙にくれければ。女房いよ〳〵嘲笑ひム、詞あのまがまがしい顏わいの。親の敵は幾人あるぞ。此方の妹御糸萩殿とやらんが。先月廿三日小夜の中山で討ち給ふ。物部の平太は敵ではないかいの。時行はつと驚き。何妹が敵平太を討つたるとは必定か。サ定か實か確氷の荒童といふ人を語らひ。易々と討つて源の頼光樣を頼み。駈込みしとは日本に隱れない事と聞きもあへず。南無三寶地天道にも見放され。弓矢神にも捨てられし。口

惜しの運命やとスエテ我が身を攝んで泣きゐたり。地女房側に立寄つて。これなう今悔んで濟む事か。詞恭くも頼光樣。妹御を匿へ給ふ遺恨によつて敵の主人。右衛門督平の正盛。清原の右大將と心を合せ。頼光樣を讒訴し。地勅勘の身となり給ふこれ程大きな騷動を。今迄知らぬとは狼狽者の浮名を。世間へ觸れうといふ事か。前後を思案して下んせ。日頃の心に似合はぬの。エ、疎しい世に連れて。心までが腐つたかとスエテ縋付いて泣きければ。地時行突立ち。扨は敵故頼光の御難儀となつたるとや。妹に先越され。親の敵は討たずとも。正盛右大將は敵の敵なり。いで二人が首とつて頼光の御恩を報じ。名字の恥を雪がんと跳出づるを引留め。それ〳〵〳〵それは悉皆氣遠か。討つに討たるゝ程ならば頼光樣に油斷があらうか。彼等は威勢眞最中討たれぬ仔細があればこそ。日蔭の御身となり給ふ此方が今駈出して心易く首取らうとは重ねて恥がかきたいか。此方が今迄色好み（いたづらで）〔山本版七行本〕娘をころりと墮したと。首をころりと落すとはフシ雲泥萬里と恥しむる。地時行ほうと行詰りアッテさうぢや過つた。然らば是より頼光の御行方を尋ね。御家來となり御威勢を藉つて正盛が。首引抜かんと駈出づるを又引留め。地たつた今恥しめた舌も引かぬに無分別。武勇正しき頼光樣。御内には渡邊の源五綱とて。一騎當千の兵。同じく碓氷荒童。鬼も欺く其の中へ生溫い姿をして。妹に先越され敵を討たぬ無念故。御奉公致したいといはれうものかいはしやるか。御取上もない時は地すご〳〵とは戻られまい。棒戴いて戻ろより往かぬ方が遙に優し。どうぞ分別はないかいの。エ、情ないお人やとフシ突倒してぞ泣き居たる。地時行道理に責められて行きつ戻りつ齒噛をなし。拳を握り立つたりしが。もう此の上の分別なしと革籠の中より。氷の樣なる鎧通押取り。服にぐつと突立て。脊骨をかけて引廻す。女房これは狂氣かと。スエテ縋り付けばアッ〳〵音高し〳〵。詞御事が今の惡言は伍子胥が吳王を諫めたる。金言より猶重し。恐らく此の一念項羽紀信が。勇氣にも劣るまじと思へども。地時來らねば力なし。それ迄まだ〳〵存らへ臆病者腰拔と。指さゝれんは無念の上の無念なり。詞我死して三日が内御身が胎内に苦みあらば。我が魂宿りしと心得十月を待つて誕生せよ。神變稀代の勇力の男子となつて。今一度人界に生れ出で正盛右大將を滅さん。地御事が身も今日より常の女に事かはり。飛行通力あるべきぞ深山深谷を住家とし。生るゝ子を養育せよさらば。〳〵と諸共に。劍を抜けば紅の。血は夕立を爭ひしフシ最期の念ぞ凄じき。あら不思議や切口より焔の塊。女房が。口に入ればうんとばかり其の儘息は絶えてけり。地斬る處に若侍五六十無二無三に群づて。館の四方を押取卷き。詞ヤア〳〵兼冬。右大將高藤公なり

汝が姫を召さるれども。頼光と綠組とて承引なき條憚り千萬。それによつて姫を引立て來るべしとの御使。亂れ入つて奪取れと。喚き叫ぶ其の聲に。倉冬公驚き給ひ。ヤア主ある娘を奪はんとは人畜類の右大將。返答するに及ばずあれ追散らせと宣へども。

地 いふにかひなき公家侍防ぐ方なく見えたる所に。伏したる女むつくと起き表に立つたる奴原を。取つては投げ〳〵姫君の在します。御簾を圍うて立つたるは フシ茫然。鬼女の如くなり。

地 正盛が家の子太田の太郎。數にも足らぬ下司女何事か仕出さん。あれ引出せと下知すれば。何某を女とや。ヲヽ女ともいへ男なりけり胎内に。夫の魂宿り木の梅と櫻の花心。妻となり子と生れ思ふ敵を空蟬の。體は流の太夫職。一念は坂田の藏人時行その證これ見よと二抱餘りの掠の木を片手捩にエイ。やつと捻折つて寄り來る奴ばらば〳〵〳〵。はらり〳〵と蹴立つるは人間業とは 三重へ見えざりけり。フシ此の勢に。

地 恐れをなし返し合はするものもなく フシ皆散々に落失せけり。ヲヽさもさうずさもあらん我が魂は玉の緒の。お命恙なく行末待たせましませとの緒の。お命恙なく行末待たせましませと姫君に一禮し。今よりは我何處を其處と白妙の三十二相の容顏も怒れる眼物凄く。島田解けて逆樣に忽ち夜叉の鬼瓦唐門。樓門四脚門塀も築地も飛越え跳越え跳越え飛越え雲を分け行方も。知らずなりにけり。

第三

地 佞人の詞は甘き事蜜の如く。人を損ふ事刃より猶速なり。清原の右大將平の正盛に荷擔し。源の頼光武勇に誇り狼藉者を引込み。民家を騷し我々が手の者大勢討取り。剩へ都まで切上らん企。上を輕しめ下を傾け候と。再三讒訴しきりなれば。遂に寵成乳虎の牙にかゝつて。到都蒼鷹の忠臣の翼も折れ。勅勘の身となり給ひ美濃の國。能勢の判官仲國は累代の被官といひ。内緣深き好によつてオクリ暫時〳〵忍び在します。

地 判官の妻小侍從一子冠者丸十六歳。夫婦親子等隔なく。家内の男女勞り仕へ奉り。御心置く方もフシ夏過ぎ秋も始めなる。西面の欄干に。色々の燈籠を飾らせ。詞此の夕暮の御徒然と御觴を參らすれば。地 頼光も遠からぬ遠茅が露に燈籠の。光合ひつゝ玉しける昔の秋を思出で。數盃を傾け興に入り。長歌作り朗詠しオクリ謠ひ〳〵給ふぞ面白き。

燈籠の段

フシ 數々廻る鶴の。影に映ふ燈籠の。色を換へ品を換へ切籠太鼓のなりもよし。籠に入れたる造花オクリ桔梗、蓮葉藤の花風に。揉れて。フシ百合の花。歌あの奥山の。一本薄。いつ穂に出でて亂れ。亂れあふひのフシ花菖蒲。我が思は深見草。小オクリ誰か。憐と白菊や紫苑岩菲に照葉繡線菊の花桶に。枝垂櫻や絲櫻(柳)。フシ水なき空の。釣舟も。焦るゝ色の。紅椿手鞠山吹。杜若。歌仙の姿置揚に。文字を透のすかし燈籠額燈籠。

フシ手際優しき。花葛。フシ振分髪を比べこし井筒燈籠井戸屋形オクリ道纏へ。はるゝ朝顔の花の臺の輪々毎に。フシ灯す燎火きら〳〵と。さながら秋の。地螢飛び交ふ宇治川の。網代燈籠親子燈籠洲濱圓扇扇團扇。扇車に水車。フシ油煙に。つれてくる〳〵と廻り燈籠。影燈籠。月も更け行く夜風に。歌廻れ〳〵品よく廻れ風車。小車の。花見車に忍びの車ア、〳〵百夜の車。餘所に主ある袖引くな。袖褄引くな フシ女郎花。地戀を菫か美人草。ハヱチ四季に色ある造花。フシ手を盞。してぞ飾りける。

地頼光甚だ興に乘じ酒宴酣の折柄。渡邊の綱碓氷の貞光御前に罷出でゝ。詞實に此の度判官殿の忠節にて。我々まで安座の段淺からず候へども。何時までかく悠々としてもあられず。御大將は誰あらん忝くも六孫王の御孫。攝津守源の頼光。郎等には先づ此の渡邊新藤の碓氷の貞光。地一席にたゞ二人なれども兩腕に百人宛。胴骨にも百人づゝ。押取つて此の座にばかり六百騎。何を浮々待ち給はん。詞惡道には方人多く直なる道には入る者少し。右大將が威勢を籍つて平家盛の世とならば。正盛四海を一呑にし萬民の歎遠かるまじ。地兩人お暇賜つて都の體をも窺ひ。諸國の御家人驅催し科なき旨を奏聞し。侯人ばら一々に搔首し。御本意遂げさせ奉らん。詞如何にしても此の樣に安閑と暮しては。筋骨たるんで精根盡果て 地候へば フシ早やお暇とぞ申しける。地頼光聞召し我もさこそ思ひつれ。さあらば兩人は伊勢路紀の路へ赴くべし。我は又北國にかゝり源氏志の勢を集め。都九條六孫王の誕生水にて出會はん。詞門出といひ貞光には未だ主從の盃せず。名乘の一字を讓る上は向後源氏の家の子ぞと。御盃を下さるゝ貞光しさつて頂戴し。天が下に二人ともなき大將軍を主君に持ち。下地の勇力十倍增し。詞一騎當千と思召されと三杯續けてつつと乾す。地能勢の判官座を立つてヲヽ目出度し〳〵。貴殿渡邊殿の武勇に肖り申す爲。其の盃を一子冠者丸に下されかしとありければ。詞お辭宜も申すべけれども武勇に肖り給ふ爲。地お望に任せんと差す盃を冠者丸。戴き〳〵敬ふ體母は見るより打萎れ。袂を顏に押當てゝ スヱテ包む涙も。おのづから フシ聲に現れ色に出で。地人々これはと御座敷興覺めてこそ見えにけれ。詞判官見かね御祝儀の折柄。不吉の落涙狂氣したるか。罷立てと引立つる。渡邊止めて。ヲヽ尤々。貞光の盃不足に思はるゝ事。母御の氣には道理至極。爰は綱が頂戴せん。冠者殿いざ差し給へといひければ。地母はやう〳〵涙を押へ御不審は御理。貞光殿をゆめ〳〵輕しむにても候はず。我が身の運の拙さと彼の子が果報の薄き事。日頃くよ〳〵思ふ事思ひあまりて涙が溢れ御祝儀をさませしぞや。御大將にも綱殿も御存じ貞光殿への物語。妾は初小侍從の局とて。御女滿仲公に宮仕へ。源氏の胤を身

に宿し誕生せしはあの若美女御前と附け給ひ。御寵愛ありしかど。頼光様の御母。御臺所の御心を憚り。地出家にせんとて十一の春より十三の秋まで。山へのぼせ給ひしに。經の一字も習はず斬つ〻張つつの弓馬の藝。蒲仲公の御憤宥めても歎きても。スエテ御憎み晴れやらず。地藤原の仲光に仰付けられ。首打たるゝに極りしに。情ある仲光忠義を重んじ我が子の幸壽丸を害し。彼の子の首とて見せ參らせ。當座の命はッシ助かりしか。地終に其の事顯れ二度の御勘氣御立腹。御親子の縁切れて妾一所に判官殿に下され。氣今自らは能勢判官仲國が妻。あの子は一子冠者丸とは申せども。地もとは滿仲公の御子頼光の御弟。美女御前にておはします。アヽ悲しきかなや同じ源氏の胤と生れ給ふ程ならば。御臺所の御腹にも宿り給へかし。然らば出家の御沙汰もなく頼光様は大將軍、あの子は又副將軍と千騎萬騎の軍兵も。從へ靡け給はん御身の末代に遺る源氏系圖の卷にさへ。美女御前といふ名を削つて入れられず。漸と鄉侍鋤鍬取の大將とは。痛はしともあさましとも。數ならぬ此の女の腹を借らせ給ふ故。地御出家と仰出されしが。果報の花の散り始め。井手の蛙のフシ蝌斗の。地小さき時は尾鰭ありさながら魚の如くにて。母蛙が親に似ぬ龍を生みしと悅べども。次第に尾鰭が手足となり常の蠙となる故に。歎き悔むと傳へしがそれは天地自然の道理。自はたまゝ源氏の大將を產落せし。悅は夢なれや覺めては平人の子となり給ふも。此の母が戒行の拙き故と積る涙は濁江に。夜蛙鳴かぬ隙もなき蝦蟇に劣りし此の身やと。御前も人目も打忘れ、ヱテかつぱと伏して。泣きければ。君をはじめ渡邊貞光諸共にておはします。アヽ悲しきかなや同じ源氏の胤と生れ給ふ程ならば。御臺所の御腹にも宿り給へかし。然らば出家の御沙汰もなく頼光小侍從の悔み至極ながら。詞子を見る事父に如かずといへり。滿仲の深き御心入れこそありつらめ。今右大將正盧等が逆賊に責められし頼光が。弟美女御前とあるならばかく安穩にあるべきか。地判官が子となりし故先づ今度の難を遁れし事。父の慈悲のこれ一つ。御勘氣の上からはもとの如く出家ともなし給はず。判官が子に賜つて弓矢の家を立てさせらるゝ。父の慈悲のこれ二つ。我世に出でてもあるならば末を見よや三つの慈悲。親の形見は兄弟ぞと打涙ぐみ給ひければ。判官親子はあつとばかり渡邊も貞光も。末頼みある源氏の光挑げ孫へたる燈籠の。影に門出の盃やお暇。賜り三遍立つ雲のフシ明くれば文月。地中の五日亡魂祭る持佛堂。北の方は唯一人香を燻き水手向け。棒ぐる花は蓮葉の露の數々亡き人の。頓證菩提と回向の折から。判官立出で同じく香華奉りフシ暫く念誦事畢り。地なう小侍從あれ見給へ。詞本尊は三世常住の佛菩薩。殊に今日は盂蘭盆にて親祖父の精靈。滿仲公の亡魂も此の持佛堂に來らせ給ふ。尊靈の御前にて申すからは

詞にも虚言なく心にも懸子なし。御身も亦偽なく眞直に返答あらば。語るべき事あり心底聞かんとありければ。ア、地今めかし何事か存ぜねども。常にも偽り申すにこそ殊に大事の盂蘭盆の。年に一度のお客の精霊佛の前にて露程も。虚言のお返事致さうか。フシ語らせ給へと仰せける。詞判官點頭き懐中より文一通取出し。コレ是見られよ。頼光是に御座の由右大將傳へ聞き。急ぎ詰腹切らするか但し密に刺殺すか。首打つて出すに於いては。一子冠者丸は由緒ある者なれば。源氏の大將と奏聞し。取立てんとの文に起請を書添へ越されたり。地されども某がゝる非道に與すべきか。頼光を密に落し奉り。右大將より咎に遇はゞ腹切るまでと。心に藏め打投ぐつて置きけるが。詞御身昨日の口説事。たまゝ〳〵満仲の若君を誕生せしかひもなく。平人の判官が子と埋るゝ冠者丸。明暮本意なく悲しゝと水に棲む蝋斗まで思ひつゞけて悔みの懐。母たるも身にては道理なり尤なり。畢竟此の判官が爲には我が子にて子にあらず。現世の親とは御身の事。地頼光を失ひ冠者丸を世に立つべきや。後悔なき樣に心の底を眞直に。聞かまほしゝとありければ小侍從はつと胸塞り。文繰返し卷返し。顔を傾け目を塞ぎ胸に手を組み差俯き。思案とり〴〵樣々にスエテ暫く應答もなかりしが。ア、詞實さうぢやものなう判官殿。假令頼光樣宮み助け落しても。斯く迄案ゆる右大將御首を見ずしては。雲の裏にもよもや助け置くべきか。時には冠者丸も世に出でず。地一も取らず二も取らず源氏の破滅。此の時なり。痛はしながら討ち奉り冠者を源氏の大將軍。清和の系圖を繼がせんは我が身の幸あの子が果報と。いはせも果てずヲ、皆まで聞くに及ばず。詞さこそ思ひて尊ねし事御首討つは今日の中。地用意せんと立つ所をこれなう。御身の爲には相傳の御主。世の襲天の咎佛神の怒も恐ろしゝ。自らが一太刀に瞞し寄つて刺通さん。場所は此の持佛堂千に一つも仕損ぜば。聲を掛くるを合圖に駈着けて首取り給へ。ヲ、潔し然らば御身討たれよ。次の間に忍び居て聲次第に駈出でん。必ず急くまい氣遣なされな首尼ようとオクリ別れてへ座敷に立出づるフシ跡見送つて。北の方恥しや男も女も慎むべきは舌三寸。子を思ふ餘りの詞に心を見擦され。疑受くるも尤詞の言譯眞しからず。所詮御身代に冠者丸が首討つて頼光の御難を救ひ邪なき誠の心。此の佛こそ證據ぞと貞女の道を守刀。袂の下にフシ押隠す。數珠も我が子に。別れの涙。地今日一日を現世未來。障子を颯と明けければ冠者丸立出で。詞今日は佛事の日とは申し乍ら。片親にてもある者は分きて祝日。地目出度くお顔見せ給へと。莞爾なるを見るにつき母は心も亂れど。さあらぬ體にてヲ、此の祝日に。詞髪をも結はず取上髪は何事ぞ。頼光樣は何方にまします。さん候築山の涼み所に御入。

我等もお側にありけるが。殘暑凌ぎ難く行水いたし髪も解き。地自鬢に取上げ見苦しからんと。つと掻撫づる手付手元も今の間の。記念と思へば胸迫り。フシ物いふ聲もしどろなり。詞これ冠者丸現世の親より未來の親が先づ大事。地行水せしこそ幸ひ帷子着替へ身を清め。御經誦んで父精靈へ手向け。詞若き身とて。無常の命いつ何時の定めはなし。自他平等の回向しや。地あつと應へて冠者丸親の襲ぬる死裝束。其の身はそれとも白帷子。フシ思染めぬぞ哀なる。地能勢の判官仲國は妻の小侍從頼光を。瞞討に討たんとは螳螂の斧。却つて御佩刀にかかり顯れては一大事。あら氣遣はし胸安からずと佛間の妻戸に窺へば。靜にお經の聲聞ゆすはやこれぞ頼光の御聲。かく御心を許されし上は何事があらん。物音のそよともせば妻戸一重蹴破つて。唯一討と鎧許抜きかけて耳を欹て控へたり。冠者丸は一心不亂な御經の日も長けたり。ア、嘆くまい後れまいと母は刀をするりと抜き。後に立つは立つたれども。髪黒々と色白に讀誦の辯舌爽に。百人にも優れし性質見るに目も眩れ心消え。太刀振上げし手も弱りフシ涙の。闇に迷ひしが。地扨可哀やな後より此の母が。斬殺すとは露知らず。蕙眼視衆生福聚海無量と誦むが不便やな。親を殺す子にばかり天罰當るは何事ぞ。我が如く子を殺す親にも罰の當れかし。奈落に早く沈みなば此の世の思はせまいものと。太刀振上げては泣き沈み消え入つては又振上げ。聲をも立てずかつぱと伏しからりと投げし太刀よりも。胸を切裂く思の刃フシ涙。玉散るばかりなり。地御經も早卷軸の時刻過ぐれど討つも討たれず。詮方盡き判官殿は在はせぬか。出會ひ給へと呼ばゝればさしつたりと妻戸蹴破り飛んで入る。冠者丸も飛退り。互に顔をきつと見合せフシ呆れて。詞はなかりしが。地母は泣く〳〵聲をあげ御不審は尤やれ冠者丸。詞右大將より頼光を討ち奉れ。御事を源氏の大將と仰がんとの内通。地判官殿の名の大事御身を害して頼光の御首と。敵を誅し御難儀救ひ。御身も母も末代に女の道忠孝の。名を止めんと此の太刀を幾度か打付けん。〳〵とはしたれども愛しい可愛に目も眩み。どうでも母はえ討たれぬなう判官殿。はや〳〵彼の子を討つてたべ。詞こりや狼狽なお主といひ元は兄。地お命に代るは本望なり。撃なり。母方が賺しうて未練の最期と笑はるゝな。目を塞ぎ手を合せ尋常に討たれてたもと。口説き給へば冠者丸顔色さつと蒼くなり。わぢ〳〵顫ひャアなんと我等が此の首討たんとや。親分ながら判官殿はもと他人。頼みにしたる一人の母情なや慘らしや。假初の煩にも樂よ炙よと宣ひしが偽か。首討たるゝ科ありとも助くるこそ親の慈悲。つれない母や恐ろしやと。逃けんとするを母飛蒐つて引留め。エ、あさましや口惜しや。ヤイ科あつて討たるゝ程ならば母が此の身

を。一分試に刻まれても見殺にするものか。詞子の命は親の命。假令御身が思切り捨てうといふとも捨てともない。御身が命は御身より母が百倍惜しけれど。地それを殺すは人界の義理といふ字に責められし。母が心を思遣れ死にともなくば殺すまい。せめて一言潔く弓取らしい詞を聞かせ。恥を雪いでくれよとて　スエテ聲を揚げて歎かる。詞判官嘲笑ひ。これ〳〵御邊の心底は顯れたり。生きとし生ける者命惜しまぬ者やある。其の一命を義によつて捨つるを弓取武士と名付け。惜むは賈人土民といふ。地左樣の下郎を御身代に取つて何の益あらん。此の上は頼光の御運次第とありければ。冠者色を直しアヽ有難き御料簡。命一つ拾ひしと逃出づちを母取つて引据ゑ。エエ恥知らず可愛さも不便さも。ふつつりと覺め果てたり長き恥を見せんより。母が慈悲ぞといふより早く拔打に討つ太刀風に。盛を待たぬ小樗やフシ首は前にぞ落ちにける。地胸に塞來る涙を押へ聲揚げ夫に近附き。詞過去の業拙く畜生を産み乍ら。人と思つて育てしは面目なくも恥しし。地斯る者を大將の御身代りとは恐れながら。我が忠孝の志を立て給ひ。詞御情には君御出世の後までも。此の子が最期は健氣なりと必ず恥を隱してたべ。地いふにかひなき最期やとフシ又咽び返るぞ道理なる。地斯る所に外樣の侍六七人馳せ來り。詞ヤア右大將より御返事遲しとて使度々に及び候。急急に有無の御返答然るべしとぞ申しける。地判官少しも驚かずあれ聞き給へ君の御難儀只今に極つて。先途の御用に立つ事は御身誠の志弓矢の冥加にかなひたり。とてもの事に最期清くせざりし事の殘念よ。血の別れとて容顏は頼光に似たれども。丸額と角額此の分にては渡されず。此の首に角入れば頼光に紛なしと。櫛笥引寄せ髪を解き元結とれば聲の中。一通の文を結込め母様の參る冠者丸と書いてあり。夫婦不審晴れやらず扨は覺悟ありけるか。但は何ぞ望み事でもありけるかと。泣く〳〵披き讀み上ぐる。聲も涙に埋れて。スエテ文の詞もしどろなり。松は千歳を盛とし朝顏は一時を一期とす。萬事は前世に定まる夢何を現を定むべき。然れば我等滿仲公の不興を受け。判官殿の子となり十三の春より十六の此の秋まで。養親の御厚恩申すにもフシ言葉なく殊更母の御恩德七生生れ替りても。報じ難く存ずる折節。詞我が首討つて頼光の御身代との志。物蔭より見參らせ望む所と存すれども。常々母の御不便荒き風にも當てられず。御身に代へての御寵愛。地其の期に臨んで歎に沈みよもや討ち給ふまじ。所詮我等臆病者未練の體を見給はゞ。御情しみの怒の刃御心安く討ち給はんと。憑とさもしき卑怯の最期。命惜むと思ふなよ。西東覺えてより終に一度も御氣に違ひし事もなく。一生の別れ今はの際の御腹立御容顏。見奉らん悲しさはスエテ來々世々の

逃なり。さりながら君には忠親には孝母の貞女の道立てば。身に於いての悦び三世の諸佛も照覽あれ。命は更に惜しからず。悲しみの中の悲しきは。年長くるまで母上の御寢間近く起臥して。今宵よりの御歎思ひやられていとほしく。御名残は盡きせず候返す〳〵と書止む。母は女を身につけ首掻寄せ。抱付いてかつぱと伏し フシ聲を揚げて泣き給ふ。地思ひ切つたる判官もわつとばかりに五體を投げスエテ消入るばかりに歎かるゝフシ心の。内こそ哀なれ。地母は涙の隙よりも。アヽ人は筋目が恥しいさすが滿仲の御胤にてありしもの。此のお心とは露知らず臆病者なりと心得て。賤しき母が口にかけ言恥しめたる勿體なさ。恐れがましく冥加なや中有の旅のお供して。言譯せんと太刀取上ぐれば判官押へてアヽ不覺なり。詞御身は慥に生の母。我ばかりは現在の主君死なば我こそは死ぬべけれど。地賴光かくと聞召さばよも存らへんとは宜ふまじ。時には此の子も犬死我々夫婦も不忠の者。地ツメ敵の使頼なり密に賴光を落し參らせ一先づ此の首の。額に智識の剃刀を戴く天の誠の道。守れば守る御佛に後世を任せて此の世には。忠義を磨く魂祭濁に。染まぬ蓮葉の花を君子に譬ふれば。儒佛の敎暗からぬ人の。心ぞ賴もしき。

第四　源賴光道行

次論〳〵仇なりと名にこそ立てれ櫻花〳〵。散りても地遂に根に歸る。フシ都の春を。特みても。浮世の淵瀬常ならぬ。流の行方汲みて知れ。スエテ源の賴光は。判官夫婦が情にて。御命遁れしとオクリ又もや。餘所に杜の下風。木の葉の雫。フシ落人の身となり給ふ。地江戸戰場出陣の折ならで。召しも慣はぬ武者草鞋。スエテそれにはあらぬ藁沓に。御足を痛ましめ。草の露散る影にだに。フシ涙は憂身を置く方も。鳴子に フシ嘆ぐ。群鳥の散々別れ落ち給ふ。フレオクリ御有〳〵樣ぞ。哀なる フシ美濃のお山は。其方とも。いさ遥に。見渡せば。野分に亂す萩芒野守の鏡埋れし。浮世の曇吹拂へ伊吹の里に軒端葺く。地苫は荒みて淋しきも。繪に寫しては美しき賤が藁屋に立つ烟。消えては結び靡きては風のまに〳〵。フシ立迷ふ。地アヽ人界の善惡に。誘れ靡く人心。スエテかくやとばかり觀ずれば。五欲七情樣々の。罪を字留間の里近き。友にも疎く親しきも不破の中山山深く。木の間に漏るゝ入相の。フシ鐘こう〳〵と物凄く。溪の棧橋。跡絶えして。地峯に妻戀ふ鹿の聲。スエテ子を悲しみて猿啼く。夜半の鵠鳥夜の鶴。フシ涙を添ふる種ならし。暮行く空は。風絶えて。四方の山々默然と座禪の相を現せば。谷の川音森〳〵と寂物語は美濃近江。國の境よ世の白菊や秣刈る。牧の童に道問へば。花に準へて小オクリ紫蘭。々々と子供さへ侮づる蕚蔓。道ひ廣がりて行く先を。フシ暮留めよと關が原。日高の柚も。打靈の嵐と袂に一時雨。セツユリ暫時宿かる笠。繩のフシ里を遥に。見渡せば。野分に亂す萩芒野守の鏡埋れし。浮世の曇吹拂へ伊吹の里に軒端葺く。地苫は荒みて淋しきも。繪に寫しては美しき賤が藁屋に立つ烟。消えては結び靡きては風のまに〳〵。フシ立迷ふ。地アヽ人界の善惡に。誘れ靡く人心。スエテかくやとばかり觀ずれば。五欲七情樣々の。罪を字留間の里近き。友にも疎く親しきも不破の中山山深く。木の間に漏るゝ入相の。フシ鐘こう〳〵と物凄く。溪の棧橋。跡絶えして。地峯に妻戀ふ鹿の聲。スエテ子を悲しみて猿啼く。夜半の鵠鳥夜の鶴。フシ涙を添ふる種ならし。暮行く空は。風絶えて。四方の山々默然と座禪の相を現せば。谷の川音森〳〵と寂物語は美濃近江。國の境よ世の

姥　嫗　山

中の。盛者。心衰の堺かと。我が身に問へば我が答。否にはあらぬ。稲葉山。後に見なして何時か復。世にも青野が原ならば。今は昔の世譚と思ひ續けて行末は。垂井赤坂青墓もフシそれぞとばかり夕ぐれ。地松の嵐のとう〳〵〳〵。さら〳〵さつと吹下し。雲の往來も餘所よりは早暮過ぎて物凄く。名をだに知らぬ山中に茫然。として三蓋へ立ち給ふ

フシ草木茂つて。地嵯々たる岨蔭横折れし。枯木の枝を見上ぐればこは如何に。老若男女の血汐の生首梢にひつしと懸けたるは。フシ只熟柿の生つたる如くなり。地頼光ちつとも臆せず。詞ムヽ言はれぬ狐狸ども。落人と侮つて魂を抜かんとな。地シヤもの〳〵と髭切抜きかけ。瞬もせず守りつめて立ち給ふ。時に向ふの木蔭より小山のやうなる大男。丸太舟を漕出す如く滑くつて歩み寄り。頼光の足許へどつかとすわりし有樣は。追剝の大將と フシ看板打たぬばかりなり。地頼光ものさばり聲こりや〳〵男。詞うぬが面相只者ならず商賣も合點なり。某は善光寺參詣の上方者。路銀を斷らし一宿すべき樣もなし。近來無心千萬ながら。和主が常々盗み蓄めし。金銀衣類はいふに及ばず。身に纏ひし古編袍腰に差いた候しも。地はや〳〵拔いて渡せ命ばかりは助けてくれんと。いはせも果てずから〳〵と笑ひ。詞ヤアラ丁稚奴が味をやるよ。身が一席の台詞の裏を食すは曲者。意地張つて大怪我まくらんより。うぬが編袍腰に差いた赤鰯も。早く爰へまけ出せ。渡さぬだてを吐出さば。こりや。地此の首の連中に加へん。西の枝か東の枝か。サア〳〵望めと詰めかくれど頼光返答も仕給はず。詞アヽ此の程の旅疲とろ〳〵と寢てくれんと。地岩角に駈上り。首二つ三つ引掴んで飛下り。ヲヽ日本一の枕ごさんなれと兩足ずつと踏み延し。寛に臥したる御有樣 フシ不敵にも亦怖ろしゝ。地山賊今は堪りかね柄に手を掛け拔かん〳〵と閂けども神武智勇の名將の。三德兼備の威に壓され眼も眩み腕痿れ。覺えず顔ひ出でけるが。迫の山賊ほうど呆れ我十餘年の今日迄。多くの者に出會ひしが一度も斯樣の不覺は取らず。詞さもあれ御身只人ならず。地包まず語り聞かされよ。なう底の知れぬ相手ぢやと フシ舌を。卷いてぞゐたりける。詞頼光打笑ませ給ひヲヽさもあらん。凡そ此の土に生ある者我が名を知らぬ事やある。源の滿仲が嫡子攝津守頼光ぞと。地聞くよりはつと飛退り頭を大地にすり着け。アヽ勿體なや〳〵。詞さればこそ始より世の常ならず見奉り候。扨は平の正盛。清原の右大將が讒言にてかゝる御身となり給ふよな。地所こそあれ此の處にて遺ひ奉るも宿世の御緣。我は卜部の熊武と申す山賊の張本。向後一命を擲ち君に仕へ奉らん。御咎取とも思召され給へかしと。思ひ入りたる言葉の末頼光御氣色斜ならず。ヲヽ頼もしし然らば今日より主從ぞや。子

孫に長く武功を傳へ幾千代かけし齋に。ト部の季武となのるべし と宜へば。有難し有難し昨日までは追剝。今日よりは忝くも源氏の郎等ト部の季武御供申す。山も谷も草も木も皆我が君の御領内。此の山の獸も鳥も蟲も皆傍輩。懸けたる首は傍輩の鳥獸への置土產。さらば〳〵と見返るや山路。返るや 三重 地フシ一洞空しき谷の聲。山高うして海近く。谷深うして水遠し。前には海水瀰々として。月眞如の光を挑げ。後には嶺松巍々として風常樂の夢を破る。刑部 鞍蒲朽ちて螢空しく去る。諫鼓苔深うして。烏驚かずとも フシいひつべし。心は昔に變らねども。地 一念化生の鬼女や人は陸奥の。長地 信夫の山にあるかとすれば今日は甲斐が嶺木曾の山。昨日は淺間伊吹山。フシ比良や横川の花曇。雪を擔ひて。山櫨の。櫨路に通ふ花の蔭 ホオタリ 憩むへ重荷に肩をかし。フシ月を伴ふ山路には。地 雪月花を弄ぶ。心は睫の目に見えぬ鬼とや人のいはゞいへ。 拍子 よし足曳の山姥が山 地 廻りするぞ苦しき。暮るゝも早き山蔭に行き暮れ給ひて賴光。道なき方に踏紛ひ。里は何處と誰にかも東西分かず立ち給ふ。御供の季武四邊を見廻しゃ。詞 あれに柴刈る女休らふからは人里もはや遠からず。屈竟の案内者これ女此の山は何といふ。麓の里へ下る者導せよといひければ。地 是は信州上路の山の巓。御麓の如く道もなく麓の道とて東北は。五十餘里秋田の地。地 幾重の谷嶺纏を渡して橋となし。怖しや唐土の蜀棧。天竺の流砂。蔥嶺とやらん難所にもまさるとかや。詞 北は越後越中の境川。これも谷二つ越え。十里に餘れば今日の中には思もよらず。地 おいとしや我等が方に泊めましたう候へども。何れも若き殿達此の柴蝶が栖家は。お嫌であらんといふ風情。不束ならぬ山人の。フシ薪花とはこれならん。詞 賴光打笑みイヤそれは逆樣。あらくましき若者ども其方こそ厭はれん。地 行暮れたる山道柴刈はおろか山姥の栖家でも。苦しからずと宜へばはつと驚く容顏にて。詞 ムム 扨は自らが山姥と見えけるか。山姥とは山に栖む鬼女。地 よし鬼女なりとも人なりとも山に住む女なれば。さ見給ふも道理やウヤヒ〳〵そも山姥は生所も知らず宿もなし。たゞ雲水を便にて到らぬ山の奥もなく。人間ならずと地フシ恐るれど。地 或る時は山柴の山路疲るゝ肩助け。里まで送る折もあり又或る時は織姫の。五百機立つる窓の梅枝の鶯絲繰り綿繰り紡績の。宿に身を置き人に傭はれ手間仕事。櫛さへとらぬ亂髮 フシ女の鬼とは理の。世を空蟬の。唐衣 地 千聲萬聲の。碪に聲のしつてい〳〵。しつていからころ槌の音。谺に響く山彦も皆山姥が業なりと。思ふも見るも人心。 拍子 煩惱あれば菩提あり佛あれば衆生あり。衆生あれば 地 山姥も。などかはなからフシざるべき。地 都に歸りて夜語にせさせ給へや。終夜語り戀らせんと庵に。誘ひ 三重 入りにける

フシ小高き所を。地しつらひ頼光を請じ奉れは。詞いや〳〵左樣になさるゝ者ならず。一夜の程は軒の下にも明すべし。見申せば一人住みの女性此方へお構ひなく。渡世の營せられかしと辭し給へば。地いや紅は園生に植ゑても隱なし。大將軍の御骨柄まがふ所候はず。詞誠や源の攝津守殿は。清原の右大將平の正盛等が讒奏にて。御身を危め流浪へ流離ひ給ふとは。山の奥にも隱なし。それとも名乘り給ひなば。自らが身の上をも語り參らせん。地定めて旅寢何をがな御饗應。折節山々の木の實も皆落果てぬ。曇實に思ひ付きたり筑紫宰府の山に。毬栗一枝昨日迄ありしもの。是を取つて參らせんと表に出でしが振返へり。必ず〳〵奥の一間を覗き給ふな見給ふな。地追付け歸らん待ち給へと。岩根を踏む事飛鳥の如く山深く。飛んで入りにけり。詞季武横手を拍つて。筑紫宰府迄五百餘里。今の間に歸らんとや。地彼奴が仕方言分始めから飲込まず。君の武功を押へんと魔障變化のなす所。詞追掛けて討留めんと駈出づるをやれ待て。詞變化と知つて立騷けば彼に心を奪はるゝ。此の方は靜まつて却つて彼奴を誘し。地勝殺に退治せんさもあれ彼が詞に從ひ。奥の一間を見ずに置かんも後れたりと。主從覗き見給へばあら凄まじや。五六歳の童五體の色は朱の如く。蓬の髪髪四方に亂れ。餌食と思しく鹿狼猪を引裂きて積み重ね。木の根を枕に臥したる樣實の鬼の子これなんめり。知らず我羅刹國に來るかとッシ身の毛。いよだつばかりなり。地時を移さず主の女栗を手折つて振搖け。歸る所を頼光膝丸を拔放し。はたと打てばひらりと外し。ちやうど斬ればはつと開き退つて睨む容顏變り。角は三日月兩眼は寒夜の星と輝けり。怒れる面にはら〳〵とフシ翻るゝ涙にくれながら。うたてやな恥かしや恨なき我が君に。仇をなさんと思はねども。御太刀影に驚きて自性を顯し候ぞや。此の上は力なき枯野の薄穗に出でて。身の上懺悔フシ申すべし。詞我元は遊女の身。坂田の何某と幾世をかけし契の中。夫の父を物部といふ者に討たせ。其の敵討たん爲飽かぬ別の梓弓。夫の運命拙くて妹に先越され。親の敵を討たぬのみか其の事故に源氏の大將。漂泊の御身となり給ふ。地今生のこの身にて此の鬱憤晴れ難し。腹掻切つて魂魄汝が胎に宿り。日本無雙の大力一騎當千の男子と生れ。敵の餘類を滅さんと天に訴へ地に叫び。スエテ誓の刃に伏したりし。地それより我が身も唯ならぬ子を望月の影深く。人倫離れし山に籠れば。何時の間にかは山巡り一念の角聳ち。歌江戸眼に光る邪正一如と見る時は。鬼にもあらず人にもあらず名は山姥が山巡り。春は三芳野初瀬山高間の山の白妙に。擬ふ霞もそれかとて花を尋ねて山巡り。秋は清き空の色。かはらぬ影も更科や。フシ姥捨山の。名に賞でて。月見る方にと。山巡り冬はさえ行く比良が

嶽。越の白山時雨行く雲を起して雲に乗り。雪を誘ひて山巡り巡り〳〵て我が君に巡り遇ひしも我が夫のフシ念力通力神力にて。地渡邊の綱碓氷の貞光只今これへ招くべし。詞哀れ我が子をも譜代の家人と思召し。敵御征伐の御馬の口をも取るならば。父が一期の素懐を遂げ母が鬼女の苦患を遁れ。地成佛得脱疑なし二世の苦み助かるも。只大將の御慈悲と角を傾け手を合せ フシ平伏して。こそ泣居たれ。地かゝる所へ綱貞光木草押分け。詞ヤア我が君是に御座候。兩人今夜信濃路を通りしに。誰がいふともなく源の頼光は。此の山の彼方にあの谷の此方にと。地手を取つて引くが如く覺えずこれ迄參りしと。申し上ぐれば頼光鬼女の神變委しく語り。フシ奇異の思をなし給ふ。地扨兩人を季武に引合せ 詞此の上は女が望に任せ。汝が一子に主從の契約せん。地これへ召せと宣へば母は悅び。童丸快童丸と呼びければ。あいと答へてつつと出で。どつかと坐したる顏の色。詞なう母樣あれは何處の叔父樣ぢや。地土產貰はう嬉しいと。手を叩いて悅びし フシ愛敬ありて凄じき。地宛然愛染明王の笑顏かとあやまたる。詞母立寄つてヤイ慮外者。あなたは常々いひ聞かせし源の頼光樣。今日より御事が殿樣御奉公精出しましよと。地申しやいのうと教へられ。はつと手をつき一禮し。詞隨分奉公精に入れ。敵の首は幾つでも。地引拔いて上げましよと。生先見えたる廣言にフシ御悅は淺からず。詞母重ねてあの岩窟に熊猪を追入れ置き。折々力を試し見れば。御覽候へあの如く引裂き候。地これお目見えのしるしに相撲所望といひければ。すんと立つて窟の口に立てたる磐石。輕々と取つて投げ退け兩手を擴げつつ立つ所に。内より荒熊飛んで出づるをどつこい任せとしつかと抱く。熊事ともせず捻付けんとすれどもいつかな動かばこそ。搦みつけばこぢ放し組付けば押伏せ。呻き哮る喉笛を二つ三つ叩きつけ。ひるむ所を取つて押へ片足掴んでくる〳〵〳〵。二三間かつぱと投げ。アヽ草臥れた乳が飲みたい母樣と フシ母が膝にぞもたれける。頼光甚だ御喜悅あり。例なき强力母が子にてありしよな。只今冠させ坂田の公時と名付け。四王天の四天を表し貞光季武綱公時。地頼光が家の四天王四夷八蠻を切靡け。源氏の威光四海に照さんしるしぞと。各さゞめきあひ給ふ綱貞光詞を揃へ。詞君は知召されずや。近江の國高懸山には悪鬼栖んで國民を惱し。折々は都方へもあらはるゝ故。諸國の武士に悪鬼退治の宣旨下るといへども。お請け申す者もなし。武勇に長ぜし武士鬼神退治あるにおいては。勳功勸賞望みに任せらるべしとの高札所々に立てられたり。地此の勢に悪鬼退治思召し立ち給へと。勸め申せば頼光それこそ武運開くべき瑞相。多くの人數無用なり主從五人山續に分け入つて。鬼神が自在に身を變じ千騎とならば千騎を

討ち。萬騎とならば萬騎を討ち天下泰平の忠義をあらはし。敵を滅す前表はや打つ立てと進み給へば。謌公時悦びヲヽ鬼神退治面白からう。これ人々公時は。生所も知らず宿もなき山姥の子なれば。地産所も山産屋も山。育つ所も山なれば山道の先陣仕ると。地眞先に立つて出でければヲヽ出來した〳〵。心にかゝる事はなし母はもとより化生の身。有るとも無しとも陽炎の影身に添うて守りの神。これ迄ぞ公時これ迄ぞ我が君。暇申して歸る山の。峰。にいざよふ月かと見れば。まだ中空に暮れぬ日影の暮れしも通力。庵と見えしも輪廻を離れぬ妄執の雲水。流れ〳〵て谷に音あり フシ棺に聲ある。風に消え〳〵。嵐に散り〳〵ちり積つて山姥となれる。地鬼女が有樣見るやや〳〵と峰にかけり谷に響きて今まで此處に。あるよと見えしが山また山に山巡り。山また山に山巡りして行方も。知らずなりにけり。

第五

謠一聲瑤臺霜滿てり。一聲の玄鶴天に啼く。巴峽秋深し。五夜の哀狼月に叫ぶ。物凄じき山路かな引。地かくて賴光四天王を相具し。鳥も通はぬ高懸山。屏風を立てたる如くなる。悪所を嫌はず主從五騎木の根に取付き岩間を傳ひ。足に任せて行先も フシ次第々々に道暗く地山とも谷とも知れざれば。とある木の根に腰打掛け スエテ少時休らひ給ひける。賴光仰ありけるは新程嶮しき山中を。はや二三里も過ぎぬれど何の不思議なき事は。必定世俗の虚設ならん。實否を糺し重ねて取卷き討取るべし。地いざ開陣せん人々といはせも果てずあら怖しや。虚空に數萬の聲ありて不思議なきや不思議ありや。思ひ知らせん思ひ知れ。ゑい〳〵どつと笑ふ聲 フシ波の打來る如くなり。地時に向ふの松が枝に五尺餘りの女の首。鐵漿黑に色白く眼の光輝くと。川邊の氷一面に朱を流せしが如くにて。につと由ばむ容顏はフシ身の毛も。よだつばかりなり。謌季武進出でよう〳〵どうも〳〵。鬼の娘に御見もじ此の季武めが思の種。八幡一夜のお情あれ心中づくなら後ともいはず。地今目の前に陸奥の千曳の石と我が戀と。重き思を比べよと大石を。えいやつと片手に摑んで投げつくれば。變化の首は其の儘に搔消す樣にぞ失せにける。地時に山河震動して雷電稻妻夥しく。二丈餘りの惡鬼の氣火炎を降らし枯木を投掛け。地石上に突立ちしうぞくだつばかん〳〵がつと。呼ばはる聲に此處の山蔭谷蔭岩蔭。松の木の間に散亂し數多の眷屬一度にどつと喚いてかゝる。さしつたりと賴光髭切を差翳し。數萬の中へ亂れ入り喚き叫んで 三重ヘ戰ひける フシ通力自在の。地變化だに名劍の德に恐れ大半滅び失せにける。謌大將破顏鬼怒をなし。賴光を目がけて飛んでかゝるを公時衷に立塞る。ヤアさせぬ〳〵。顏の赤いが自慢か。そつちの顏が赤ければ俺が顏も眞赤いな。

母様よりの護の力の鹽梅見よと。地夕日に輝く黄葉の何れを夫と紅の。両手を掛けて組んだれども。二丈に餘る鬼神の姿二尺に足らぬ公時が。膝節迄も屆かばこそ幾年經りし楠の根を。纏ひたる朝顔の朝日に消ゆる命の程。危くも亦不敵なり。鬼神苛て片手を伸べ公時が。胴骨攫んで輕々と差上げ。微塵になれと投付くれば宙にひらりと跳返り。落様に鬼神の両足一つに攫んで羽交締。大地にどうと打付け。起上がるを踏倒し打伏せ。捻伏せ殴伏せ馬乘にしつかと乘り。一息ほつと吐いたりしは悪鬼に優りし勢。實に山姥の御子息。フシいや〳〵どつとぞ褒めにける。地渡邊季武貞光なんと我も我もと馳集り。千筋の縄をぞ懸けたりける。ヲヽ心地よし潔し只此の儘に都へ曳け。合點ぢやまつかせ公時が胴より太き大綱を。しつかと攫んでヤア 番頭遣るぞえ。本綱中綱末遣でせい。ヤア天魔のひよえい。遣るい〳〵天魔の通力を。悉く滅して凱陣。あるこそ 三重へ目出度けれ。かくて帝都には高懸山の變化の討手。諸卿詮議ある所へ。大納言隼冬公參内あり。扨も其が聖源の頼光勅宣の御高札に委せ江州高懸山に分入り。變化を生捕り入洛仕つて候へども。勅勘の身を憚り某を以て奏聞仕り候。地早く佞臣の賣否を糺され。賞罰を願ひ奉るそれ〳〵とありければ。公時が縄取にて三人四方を取圍み。庭上に引据ゑたる鬼神は怒り喚く聲。宮中に鳴渡り帝を始め月卿雲客。宮女上下の男女迄 フシおそれ慄くばかりなり。詞關白忠平御階近く出で給ひ。變化退治の武功叡感淺からず。此の恩賞によつて頼光出仕御免あり。早々鬼神の首を切り淀河の柴漬に。沈むべしとの綸言なりと詞も未だ終らぬに。詞渡邊居丈高になりからからと笑ひ。こは一天の君の勅諚とも覺えぬものかな。もとより罪なき頼光が御免ありとは何の事。鬼神退治の恩賞は望み次第との御高札によつて。我々一命を擲ち鬼神を生捕り候へども。未だ洛中に平の政盛といふ恐ろしき鬼神栖んで。科なき者を讒し國土を騷し候。彼奴を我々に賜つて此の鬼神と一所に退治仕らん。是第一の望なりと憚りなくぞ申しける。地關白殿を始め在りあふ諸卿色を損じ。威勢旺の正盛假令如何なる過ありとも。誅せん事叶ひ難し。何にても外の義を望むべしとありければ。詞貞光を始め季武公時口々に。叶はぬ望をまだまだと申しても無益の至り。此の方御無心申さぬからは其方の御用も承らぬ。此の談合さらりつと元へ戻し。此の鬼神の縄を切解き庭上に放ち。我々も腹掻破り共に悪鬼と現れ。禁裡はおろか日本國に仇を爲さんと。地既に縄を切らんとす卿相雲客あら怖や。やれ待て渡邊鹿相しやるなら。貞光殿季武殿。公時とやら好い子ぢや頼む縄解くな。鬼を放して堪るものかと。御簾や几帳に身を縮め フシ顫ひ慄き給ひける。地關白道理に服し給ひ奏聞衆議判力なく。檢非違使勅を蒙

り て正盛に縄をかけ。四天王に渡さるゝこは有難しと引伏せ。 詞サア一人は片付けたり。とてもの事に清原の右大將高藤といふ。で悪人の鬼の棟梁も賜らんと。 詞言上すれば諸卿目と目をきつと見合せ。固唾を呑んで在します關白殿眉を顰め。 詞忝くも高藤は女院の御弟。如何に罪科あればとて。右大將の官人武士の手へ渡されし古例なし。此の義に於ては叶ふまじと宣へば。ムゝ御尤々々。ならぬ事を是非とは申さず。 地さらば鬼の縄解けとつつと寄ればアゝ〳〵氣の短い。渡邊殿談合せう綱殿と。周章騒ぎ給ふ所へ右大將つつと駈出し。 詞ヤア推參なる童ども。己れ等が如き匹夫の分にて某を滅さん事。蓬の絲にて大石を釣下げんとするに似たり。早く其の場を立退くべしと嘲笑つて立つたりける。綱は堪らず駈出で高藤が。諸膝搔いてどうと引敷き。ヤア匹夫とは誰が事。己れが罪は天下一統存じの所。白狀に及ばずと高手小手にぞ縛めたり。 地時を移さず勇中納言兼冬卿。賴光を誘引し參内あれば叡感甚だ麗しく。源氏の本領舊の如く鎭守府の將軍に任ぜられ。兼冬の姫澤潟姫四位の女官に補せられ。御祝言の吉日まで フシ勅諚あるぞ有難き。 地扨右大將の配所は鬼界が島へ。正盛は鬼神と共に誅すべしとの綸言。こは有難し有難しそれ計らへ承ると。正盛を引出し首宙に打落し。殘る鬼神は四天王が嬲殺の手玉ぞと。貞光季武兩足とれば公時片手に角を持ち。鬼々聲して曳く程に。難なく首を捻切つて左右へさつと。退いても退かぬは夫婦主從一門一家。緣者親類豐なる流を汲んで源の。民も繁昌國繁昌五穀豐饒の民繁昌。蓬萊國の秋津島治まる御代とぞ祝ひける。

姫山姥

右此本者以太夫直傳寫之
文句音節等悉校合加祕密
令開版者也

大阪北久寶寺町御堂筋 竹本筑後掾 正本屋仁兵衛